
assassino di argento

夜月 雪那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a s s a s s i n o d i a r g e n t o

【Nコード】

N 8 0 1 9 U

【作者名】

夜月 雪那

【あらすじ】

『あの塔には、世にも美しい“殺し屋”が住んでいる』そんな噂が流れる国フィレーネス。噂の主は銀の髪に銀の瞳をもつ青年。彼は組織を通し、依頼を受け、その依頼をこなす。此度の依頼人は国王。ターゲットは怠惰な大臣。ターゲットは絶望を味会わせてから消すのが彼の信条。さて、此度はどのように依頼をこなすのか。 - - 作者の気分転換の為に書き始めました。皆様に少しでも楽しんでいただけると嬉しいです。

第一話 噂の主

此処はフィレーネスという名の国。

中央には巨大な城が聳え、周りを囲むように家々が立ち並ぶ。城の周りには貴族の屋敷が。またその周りには民家が並ぶ。王族が住む城をメルティアナ城。貴族の住む区域をラトス。民家が並ぶ区域を都会と呼ぶ。

その都会の一角にある真っ白な塔。そこには誰も寄り付かない。不吉な噂があるからだ。

『あの塔には、世にも美しい“殺し屋”が住んでいる』と――。

真っ白な服に身を包み、人込みの中を歩く。昼時の今、通りは人で溢れている。通りを行く奴等からの視線が鬱陶しい。外を歩く度にこれだ。

服装は一般的。長いズボンにシャツ、その上に裾が長いコートを羽織る。基本的に一年中この格好だ。

しかし、服装は一般的でも、その白さは目立つ。周りを拒絶するかなのような色は目を引く。

「うざってえな」

俺は呟きを零す。

こっそり見てるつもりなのか？気配で丸分かりだ阿呆共め。まあ、見てくるだけならまだましだ。無視すりゃ良い話だからな。

が、

「ねえね、一人？あたしらと遊ぼ」

…出やがった。いかにも頭の軽そうな女。一日に一人はこういうのがいやがる。しかも今回は二人組みかよ。二対一とかおかしいだろうが。

俺は無視して歩き続ける。

「無視しないでよ」

もう一人の女が俺の腕を掴む。

「うるせえ、話しかけんな」

俺はその腕を振り払い、女を睨みつける。すると、女達は青褪めて逃げて行った。

「何で話しかけてくんだよ、面倒くせえな」

俺は舌打ちをする。

これから仕事だつてのに。遊んでる暇なんか無いつつの。

俺は内心で悪態をつきながら歩みを再開する。目の前にいる人間は自然と俺を避けていく。俺の前だけ不自然に道が出来る。これも、何時もの事だ。

「今回のターゲットは誰だろうな」

どうせ雑魚だろうけどな。つまんねえ。

俺は盛大に溜め息を吐く。周囲の人間が見てきたが、完全に無視。此処最近の仕事は雑魚ばかり。久しく大物に遭遇していない。このままでは腕が鈍りそうだ。

俺は憂鬱な気分になりながら、一軒の店に入った。

ソーディアンというバーだ。まだ昼間なので、客などいない。そもそも、店すらやっていない時間だ。

「やっと来たな。遅いぞ」

俺が入るなり声を掛けてきたのはバーのマスター、シンラだ。俺の雇い主でもある。いや、雇い主の部下、だ。

「女共に捕まっただよ。振り払ってきたけどな」

俺はそう言いながらシンラの正面のカウンターに座る。すると、目の前にグラスが置かれ、酒が注がれる。

それを一息に煽り、グラスをカウンターに叩きつける。勿論、グラスが割れない程度の力で。

「またか。お前顔の造形完璧だもんな」

グラスを拭きながらシンラが笑う。その瞳にはからかいの色が浮かんでいる。

「俺に取っちゃ何で俺みたいなのが良いのか理解不能」

カウンターに肘を突き、手の甲に頬を乗せる。

女共が毎回うざくてストレス溜まるんだよ。内心でばやくが、口には出さない。

此処で言ったら何時まで経っても本題に入れやしねえ。尤も、言わなくともシンラにはお見通しだろう。

「で、今回のターゲットは？また雑魚か？」

俺が本題に入るように促すと、シンラの顔つきが変わった。それまでふざけていた雰囲気が一瞬で鋭くなる。

「喜べ、今回は大物だ」

そう言っただけの端を吊り上げて笑う姿は恐ろしい。声もさっきより数段低い。一般人が見たら腰を抜かしそうだ。

「誰だよ。もったいぶらずにさっさと教えろ」

俺は見慣れてるから全く怖くない。むしろ、シンラのその顔は好きだったりする。こういう顔の時は大抵大きい依頼だったりするからだ。

てか、一般人って言えねえよな、俺。色んな意味で。

俺は身乗り出してシンラに先を促す。

「流石シルバーだな。塔に住む世にも美しい殺し屋、だっけか？」

シンラが笑う。噂を知っていたらしい。まあ、こいつが知らない訳ねえか。

そう、俺は殺し屋だ。シルバーと言うのはコードネームだ。本名はシルディ・レジスタ。年は十八。この世界に入ってから六年になる。

権力を振りかざす両親に嫌気がさし、この世界に足を踏み入れた。両親は既にこの世にいない。俺の最初のターゲットだったからだ。

「象牙のように滑らかな白磁の肌に人目を引く腰まである銀の髪。光の加減で銀にも紫にも見える瞳。

女がほっとかないわな」

シルバーと言うのは外見からついた名だ。個人的には気に入っている。銀は、刃物の色でもある。全てを切り裂く刃物の色。

それに、気高い色だ。白も、黒も。

「俺が良いとか趣味わりいな。そもそも、俺にはもう女がいるっつの」

「ルティアナか。今何処で仕事してんだ？」

「国の東の外れのフォーパウだ。組織一つ潰してくるらしい」

俺はルティアナこと、ミリア・カストールと付き合っている。まあ、会える回数は少ないが。

お互い仕事忙しいのだ。特に、ミリアは国内全土を飛び回っている。次何時会えるか分からない状況だ。

「ま、それは置いといて」

シンラはそう言いながら一枚の紙を取り出す。カウンターに置かれたそれは依頼書だ。

「今回お前にはタスク・ウォーレンを殺してもらっ」

シンラは笑っているが、今とんでもない事を言った。確かに、大物ではある。ある、が。

「それって大臣だよな？」

「当たり前だろ、他に誰がいるんだ？」

シンラは当然のように頷いた。

当たり前って、そんな軽く言えるようなターゲットじゃねえだろ。俺は内心で溜め息を吐いた。

まあ、昔も大臣とその妻を殺った事はあるけどな。一番最初に。
フィレーネスは王政だ。

国王が頂点に君臨し、その補佐を四人の大臣が行う。

大臣はそれぞれ色を司る。紅、蒼、銀、碧。大臣は自分の司る色

を身に纏うのが慣わしだ。

「お前、殺した事あるだろ？銀を司る大臣、アレク・レジスタを」

「父親を、な」

シンラの言葉に俺は暗い笑みを浮かべる。

俺の父は大臣だった。その後継と言う事で、俺は幼い頃から様々な事を教え込まれた。

帝王学、経済学、心理学、薬学、医学、剣、弓、槍、等々。覚えの早かった俺は、およそ子供らしくない子供だった。

だが、そのお陰で、今は殺し屋として名を挙げている。

「依頼人は先代国王のリンク・ハバードだったな。謀反を考えてたとか？」

「ああ。毎日飽きもせず言ってたな。『私こそ国王に相応しい』とか何とか。母も賛成していたな。

何処までも腐った奴らだった。吐き気と罵詈雑言を飲み込むのが大変だったな」

俺は嘲笑を浮かべる。今は亡き両親に、いや、一組の男女に対して。

あいつらを殺す時、何の感情もなかった。悲しみも、喪失感も、後悔も、怒りも、喜びも。血で汚れた剣を見ても、血で染まった手を見えも。

あつたのは、一種の達成感と、おぼろげな安堵だけ。

あいつらを親だと思った事は一度もない。それは、あいつらも同じだったはずだ。あいつらにとつて、俺は子供ではなく出世の為の道具。今以上の権力と富を手に入れる為の。

お陰で感情を隠すのも、人を騙すのも得意になった。

「今の大臣はアレク程に腐ってるらしいぞ。いや、アレクは仕事してたからまだましか」

「大臣の癖に仕事してないのかよ？」

俺は顔を顰めた。

大臣は責任ある地位だ。慣れるのは家柄が良く優秀な者だけ。大変だが、その分給料の額はとてつもない。

能の無い者は直ぐに辞められる。特に、仕事をサボる奴は。

「調べる。お前ならお手のものだろ？」

シンラは問いに答えずに笑って言う。

事実なので、特に反論はしない。情報を手に入れるのは簡単だ。

「依頼人は？」

俺は立ち上がりながらシンラに問う。

依頼書はカウンターに置いたままだ。依頼書の持ち出しは厳禁。人の目に触れては困るのだ。

「そのうちお呼びが掛かるさ」

「お呼び？」

シンラの答えに、俺は怪訝な声を挙げる。自然、眉間に皺が寄る。

俺が住む白い塔には誰も近寄らない。周囲十mに立ち入り禁止令が出ているのだ。何故かと言うと、ある一人の馬鹿な男のせいだと言っておこう。

「ああ、驚くと思うぞ」

「良い意味でか？それとも悪い意味でか？」

「さあな」

それ以上答えようとしないうちにシンラに、俺は追及するのを止めた。シンラは口が堅く、人をからかうのが趣味だ。今もニヤニヤしながら俺を見ている。

「まあ良しさ。腐った奴は消すだけだ」

「楽しみにしてるぜ、シルバー」

バーから出て行く俺の背中に、シンラがそう声を掛けた。

そう、腐った奴は消すだけだ。なるべく、苦しませてから。

「俺には、それしか出来ないからな、あいつの為には……」

人込みの中を我が家に向かって歩きながら、俺は呟きを零した。
その呟きは誰の耳にも拾われる事無く、一陣の風に消えた。

第一話 噂の主（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、お手数ですがお知らせ下さい。
なるべく早く訂正したいと思います。

感想大歓迎です。

感想いただけたら泣いて喜びます。

第二話 天然…？

俺は我が家である白い塔に入ると、二階に上がった。

この塔は八階建てだ。一階は客間、二階は書斎、三階はリビング、四階は風呂、五階は寝室だ。

六階に続く部屋には鍵が付いている。見られたらやばいものがあるからだ。

六階にはスパコンが、七階には仕事に必要な道具、八階には鉄製の椅子が部屋の中央に鎮座している。

「さて、どうすっかな」

俺は壁際の本棚に入っている本の背表紙を見ながら呟く。

この部屋にいと、不思議と落ち着く。計画を練るのはこの部屋で考えるのが一番だ。落ち着いて考える事が出来る。

いかに後悔させるか、絶望させるか。その為には、舞台を整え、役者を揃えなければいけない。

俺はソファアの背もたれにもたれかかり、真っ白な天井を見上げる。

「取り敢えず、情報でも集めるか」

ターゲットの人相と性格と行動と、出来れば弱みか弱点。女関係

であつたいざこざとかがあれば便利なんだがな。

俺は階段を上り、鍵を開けて六階に移動する。

スパコンがある部屋だ。昔は大分大きかったらしいが、今では大分小さくなっている。

ただし、ファイルネスにあるスパコンは全部で三台だけだ。一台は城、もう一台は法務省に。そして、もう一台は此処に。

これは糞親父が闇オークションで落札したものだ。それを貰ったのだ。あの糞親父には使いこなせなかったからだ。ざまあみろ。

とはいえ、俺が貰ったのは五歳の時だ。まあ、苦勞せず使いこなせたけどな。おかげでハッキングもお手の物だ。例え、それが王宮のスパコンであろうとも、な。

「7:30起床、8:00朝食、9:30謁見、10:00執務、10:30昼寝。12:30起床、13:00昼食、14:30散歩、15:00昼寝、18:00起床、18:30夕飯、20:00女共と遊戯」

俺は調べたターゲットの一日の過ごし方を口頭で繰り返す。

何とも自堕落な一日だな。毎日仕事は一時間。その上執務をほっぽつての昼寝が二回。飯は一時間半掛けて食べる。拳句の果て女一人ではなく複数とは。

怒りを通り越して呆れるしかない。

あれか、太ってんのか。いや、タスクは金色の髪を肩まで伸ばして襟足だけ長くて、紺碧の切れ長の瞳ってあるな。…夜に発散してんのか。ご苦労なことて。

「今の国王大丈夫か？こんなのが野放しとか」

俺は現国王の顔を思い浮かべる。

黒い髪に蟲惑的な群青色の瞳。加えて甘いマスク。幼い頃から女心を掴むのが得意で、お前は本当に子供か、と突っ込みたくなるような事を言っていた。

俺も子供らしくなかったけどな、別の意味で。

しかし、あいつの顔を思い出すだけで気分が悪くなってくる。

「気持ち悪かったんだよな、あいつの吐く甘ったるい言葉が。…いや、今もか」

大人になっても性格は変わらなかった。寧ろ、外見が凛々しくなった為に、悪化したな。周りの令嬢に及ぼす影響が。

「てか、依頼人たぶんあいつだよな、大臣がターゲットってくらいだし」

俺は憂鬱な溜め息を吐いた。

今日はもう何も考えたくねえ、寝る。で、あいつが依頼人じゃない事を祈ろう。

が、その願い空しく、城から招待状が届いた。王主催の夜会の招待状だ。

それと、これを着て来いということであろう夜会用の衣装が。

「明日、か。パートナーどうしろってんだよ」

俺は送られて来た物を見て溜め息を吐いた。

ミリアは遠くにいる。今から呼び戻しても間に合わない。というか、仕事中だから呼び戻すのは無理だ。

かといって、他にパートナーに出来る程親しい女性もない。

最近社交界とか出ねえからな。大臣の息子だった俺は城で軟禁状態って事になってるし。国王が実際にやるのはありえねえけど。あいつの好意は正直暑苦しい。

その恩恵に与っているのは事実だから本来はもつと感謝すべきなんだよな。たぶん。

が、感謝すると調子に乗って余計な事までやるから嫌だ。昔服をもらって感謝したらその後大量の服を送ってきやがったからな。

俺が昔を思い出していると、階下から人の気配がした。誰か来たらしい。鍵は掛けておいたから、合鍵を持っている奴だろう。

とはいえ、六階に続く鍵は俺しか持っていない。迎えに行くしかねえか。

俺はスパコンの電源を切ると、人の気配がする三階のリビングに向かった。

「あ、降りて来た。コーヒーで良い？」

「ああ、頼む」

慣れた手つきでお茶の準備をしていたのは、予想通りの人物だった。鼻歌を歌いながらコーヒーを入れていているその人物は、今は依頼でいないはずなのだが。

「で、依頼は終わったのか？」

俺は椅子に座りながらその人物、俺の女であるミリア・カストールに尋ねた。

「うん。予想以上に弱かったから、早くに終わったんだ。シンラにシルデイを手伝うように言われたから急いで帰って来たの。言われなくても直ぐにすり帰るし、手伝うのにね」

笑顔で言うミリアは十七歳。コードネームはルティアナで、その美貌故に噂になっている。

豊かな黒髪は緩く波打ち、紫紺の瞳は明るく輝いている。ほっそりとした体系ながらも、女性らしい優美な曲線を描く体は白磁のようだ。

ただ、手を出そうとすれば返り討ちに遭う事間違いないし、だ。ミリアの得意技は毒などだが、体術も一般人よりは出来る。

「で、何手伝えば良いの？」

ミリアは両手にマグカップを持って椅子に座った。

俺は答えず、コーヒーを一口飲んだ。ミリアの淹れたコーヒーを飲むと、ほっとする。

「明日俺は城の夜会に行つて来る。ミリアに頼むのはその後だ」

「え、夜会行くの！？私も行きたい！！」

「駄目だ。今回は依頼者との顔合わせを兼ねてる。夜会とか舞踏会は仕事が終わったらな」

頬を膨らまして睨んでくるミリアの頬を突付く。

柔らかいな、相変わらず。マジで癖になりそう。いや、もうなってるか。

しばんだ頬を手の甲でなぞると、ミリアはくすぐったそうに身じろぎした。その反応に気を良くした俺は何度も頬を撫でる。

「て、何か話逸らそうとしてない？」

暫くすると、我に返ったミリアが恨めしそうな目で見てくる。

「別に逸らそうとした訳じゃねえ。したかったからしただけだ」

俺はミリアから手を離し、コーヒーを飲みながら答える。

好きな女が目の前で可愛い表情をしていたら触りたくなるのが普通だろ。顔を見るのも久しぶりだから尚更。

「…分かった。今回は我慢する」

ミリアは俺を睨みながら言う。ただし、その表情はどこか嬉しそうだ。

「でも、仕事が終わったら連れてってね！シルディを見せびらかすんだから！」

ミリアは俺を指差して叫んだ。

…何でそんな嬉しそうなんだ？てか、俺を見せびらかすのか？

「俺がミリアを見せびらかす、の間違いだろ？」

俺はコーヒーを飲みながらミリアの言葉を訂正した。

ミリアを何度か夜会に連れて行っただが、その度に男共の視線が鬱陶しかった。思わずその目を抉りたくなる程に。俺の女に手を出す野郎は殺す。誰であっても、だ。

「…シルディってさ、天然？」

「何がだ？」

何故か顔を真っ赤にして俯いているミリアが言う。

俺は何故天然と言われているのか分からず、首を傾げた。

思ったことを言っただけだが、何かまずったか？

「私なんか見せびらかしても良い事ないよ？」

「それは俺の台詞だな。ていうか、お前って殺気とか敵意には敏感なのに好意には鈍感だな」

上目遣いで見て来るミリアを可愛いな、と思いつつ言っ。

「その方がミリアを独り占め出来て都合が良いけどな」

と、何故かミリアが一層顔を赤くした。首筋も耳も真っ赤だ。熱でもあんのか？

俺が首を傾げると、ミリアが声を絞り出した。

「不意打ちの笑顔は反則だと思う」

と、言われた。無意識の内に頬が緩んでいたらしい。が、笑うなと言われても無理だろ？人間つい笑っちゃうもんだ。

「笑わない方が良いか？」

「いや！寧ろ笑って欲しいんだけどね！？その笑顔を見た女の人たちがシルディに群がりそうで…」

俺が尋ねると、ミリアは椅子を蹴倒して立ち上がり、全力で否定した。その語尾は段々小さくなっていき、最後には消えた。

そうか、俺が笑うと女共が寄って来るのか。面倒くせえな。

「俺が他の女に笑うと思うか？ミリア以外興味無い」

俺はコーヒーを飲み干し、マグカップを洗うために席を立ち、シンクに向かう。

「…恐るべし天然」

洗っている途中、そんな声を聞いた気がしたが、気のせいだろう。

てか、俺はそんなに天然な発言をしたか？全く覚えが無い。

第二話 天然…？（後書き）

夜会の招待状が届いたのに、舞踏会としてしまったので訂正しました。

依頼人登場

翌日の夜、俺は城に出向いた。城で開催される夜会に参加する為だ。

服装は何時ものように白だが、夜会に相応しいように金と銀で刺繍が施されている。職人が作った一級品だ。

城には迎えに来た馬車で向かっている。国王が毎回毎回送ってくる招待状に返事を出したのだ。仕事だからしょうがなく。

今着ているような目立つ服は着なくなかったが、国王が直々に送ってきたのではしょうがない。それを着ていけないのは不敬だ。

あいつに不敬とか今更だが、狸爺共がうぜえからな。

狸爺とは、勿論大臣や貴族達の事である。

幼い頃遊んだ事のある現国王は俺の容姿が気に入ったらしく、何故か色んな場所を連れ回された。大人達にもあいつを見張るように頼まれた。

年上の王子の監視。監視って普通騎士とか侍女とかやらせるよな。何故かあいつを止めるのは俺の役目だったし。あの頃はよく頭痛がしたな…。

俺は昔を思い出して遠い目をした。

その間にも城は近づいてくる。

城に行くのは気が進まないが、仕事の為には我慢するしかないだろう。これで生計を立てているのだから。

国王がいなけりや気が楽なのにな。主催者がいない夜会とかありえねえけど。絶対目ざとく見つけるんだよな、あいつ。

そんな事を考えているうちに城に到着してしまった。巨大な門をくぐり、整備され、蝋燭で照らされた美しい庭の中を馬車は進んで行く。

暫くすると、城の入り口に着いた。扉は大きく開かれ、明かりとざわめきが漏れている。

溜め息を吐きながらシルディは馬車を降り、城の中に入っていった。

「シルディー！」

夜会の会場に入り、周囲からの視線を鬱陶しく思っていると、一人の青年が叫びながら走って来た。年の頃は二十代前半程だ。

青年が勢いのまま抱きついてくる寸前で横に移動すると、青年は俺の背後の壁に激突した。

心の中で合掌しておく。

「く、相変わらず反応が早いね」

赤くなつた鼻を押さえながら青年がシルディを振り返る。

「くつつくな。お前国王だろうが」

そう、この情けない顔をしている青年はフィレーネス国王、ウィリス・ネイビルだ。

俺からすればただの問題児の変態だけだな。

だが、政治手腕は確からしい。のくせに、大臣は腐っているが。

「気持ち悪い、そんな顔で見んな」

痛みの為か、ウィリスの瞳には涙が浮かんでいた。

「久しぶりの再会なのに酷くないかい？それでも国王だよ？国で一番偉いんだよ？」

俺に権力で対抗しようってか？良い度胸だ。

俺は内心で吐き捨てると、笑みを浮かべた。

「そうですね、国王陛下。私のような者など放っておいて社交に勤しんでは如何ですか？

まだ許嫁がいらっしゃらないのでしょうか？陛下も今年で二十二になられます。そろそろ身を固めるべきでしょう」

愛想笑いを浮かべ、臣下として丁寧な口調で話す。勿論、単なる嫌がらせだ。

「シルデイの意地悪…」

ウィリスがまたも泣きそうになる。

こいつって俺に口で勝てた事無いよな。武術系もだけど。いや、頭は回るから国王としては十分か。これが国王とか信じたくねえけど。

俺はいじめてしゃがみこむウィリスを見下ろした。幼い子がやれば可愛いのだろうが、整った顔の青年がやると気持ち悪いだけだ。

「ウィリス様！こんなところでいじけないで下さい！イメージが壊れてますよ！」

小声で叫びながら誰かがウィリスの頭を叩いた。声からして女性らしい。

俺が視線を移動させると、赤色が視界に映った。肩で切りそろえた赤の髪。服装は騎士の正装。

「カルラ、痛い」

ウィリスが呟きながらカルラを見上げる。が、カルラは厳しい目でウィリスを見ていた。

「皆様の邪魔です。退いて下さい」

冷たい声でカルラが言い放つ。そのやり取りに、こちらを気にしていた出席者達が苦笑をもらす。

このやり取りは日常茶飯事、って事か。相変わらず差が激しいな、こいつ。やる時は国王らしく威厳たっぷりで頼りになるのに、普段はこれかよ。

てか、国王ならこんな場でそんな醜態さらしたら駄目だろ。周囲に子供を見守るような生暖かい目で見られてるし。

そう、このウイリス・ネイビル。うざったいし馬鹿だが、何故か嫌いになれなかったりする。普段馬鹿すぎて思わず手を差し伸べてしまうのだ。

貴族の令嬢曰く、母性本能をくすぐられるとか。あと、普段と仕事の時のギャップが良いらしい。

つまり、受けは良いのだ。国民からの人気も厚く、人望もある。完璧過ぎるよりは、人間らしくて良いかもしれない。

「ごめんなさい」

ウイリスが頂垂れながらも立ち上がる。国王をしての威厳は欠片もない。

二人はそのまま中央の方に進もうとしたので、俺は反対方向に進もうと足を向ける。

が、歩き出す前に腕を捕まれた。逃がさない、という意志が込められた力強い手に。

「依頼人を放置する気？」

その言葉にやっぱりか、と思いつつ、諦めて付いて行く。仕事の為に来たのに依頼人と話が出来なければ意味がない。

ちっ、目立ちたくなかったのに。こいつと並ぶと嫌でも目立ちちまうじゃねえか。

俺は内心で吐き捨てたが、既に目立っていた事には気付かない。特に、令嬢からの視線が多かった事など知る由も無い。いや、知っても無視だけだな。

ウィリスに付いて行き、辿り着いたのは数段高い場所にある椅子だった。国王専用の椅子だ。その隣の王妃の席は空席。

「勝手に何処かへ行くなよ」

その椅子に座ったウィリスは表情を改め、国王として俺に言う。

まるで別人のような態度にシルディは呆れながらも変わり身の早さに感心した。

「分かりましたよ」

逃げようとした事がばれたのか、ウィリスに釘を刺され、小さく舌打ちしながら答える。

「申し訳ありません。陛下はわがままな方ですから」

舌打ちに気付いたカルラが謝罪してくる。

というのに、本人は何処吹く風だ。

一発その横っ面を殴り飛ばしてやりたい。いや、相手はこんなんでも王だから駄目だよな、依頼人だし。

「知ってるよ。小さい頃からそうだった」

俺は溜め息を吐く。

このウイリス、小さい頃は王太子という身分を盾に随分わがままを言っていた。

しかし、優秀だったために誰も口出しできない。というか、口出ししようとする、笑顔向けられるのだ。威圧感に溢れた輝かんばかりの笑顔。

あれに対抗できる奴はいなかったな。俺と先代国王ぐらいか、平気だったのは。

「申し遅れました、国王付きの騎士団長、カルラ・リーディアと申します。以後御見知りおきを」

「シルディ・レジスタだ。どうぞよろしく」

丁寧に名乗るカルラに、俺も名乗り返す。

女性が騎士団長を務めるのは驚きだが、それだけの实力があるのだろう。実際、こうして話していてもカルラに隙と言う程の隙は見当たらない。

それに、女性が常に傍にいるならウィリスも多少は大人しいだろう。多少は。

「で、ウィリス。タスクはどいつだ？確か翠だよな？」

辺りを見渡すが、いかんせん人が多すぎる。

つたく、どいつもこいつも無駄に着飾りやがって。眩しくて目が潰れたらどうしてくれるんだ阿呆貴族共め。

そんなに着飾って何が楽しいのか全く理解できねえ。したくもねえけど。

「まだ来ていない。最後の方に女性を数人引き連れてやって来るさ」

挨拶を述べに来る貴族達の列が途切れ、一息つきながらウィリスが答える。

「来るまで暇だな」

面倒くせえ。何でいねえんだよ。それまで何をしていると？

夜会が終わるのって何時間も先だよ。…帰りてえ。この鬱陶しい視線から開放されたい。

が、仕事放棄する訳にもいかねえしな。まだウィリスに依頼の詳細聞いてねえし。今は喋れるような場でもねえし。今後の為にもタスクを観察してどうするか考えたいしな。

「…しょうがねえ、待つか」

「踊ってくれば良いじゃないか。もう直ぐ曲が始まる」

ウィリスが事も無げに言う。

国王が踊るのは分かる。主催者なのだから、一番最初に踊る。

が、俺が踊る必要性は無い。正直言つて面倒くさい。ダンスなんて最近全くやっていない。覚えているかどうかも怪しい。

「そついや、誰と踊るんだ？」

「僭越ながら、私がパートナーを務めております。私なら陛下付きの騎士ですから、令嬢方の余計な詮索を受けずにすみませうから」

俺が尋ねると、ウィリスの代わりにカルラが答えた。

「そうか。だがな、ウィリス。俺にはパートナーがいらない。だから踊るのは無理だ。そもそもダンスなんて忘れた」

「パートナーなら沢山いるだろう？ 踊りは俺のを見て覚えれば良いじゃないか」

俺が言つと、ウィリスが言い返す。

そのにやけた顔を殴りたい。本気で殴り飛ばしたい。てか、一人称変わってるじゃねえか。どんだけ面の皮厚いんだこいつ。

いや、面の皮の厚さは他人のことも言えねえか。

「パートナーなんて何処にいるんだよ」

「気付いてるだろう?」

ウィリスはそう言いながら会場の方に視線を向ける。

その視線を辿ると、数人の令嬢がいた。明らかにこちらを見ている。

俺達に見られていると気付いた途端、頬を紅く染めた。しかし、こちらに視線をちらちらと飛ばしている。

「だろう?」

ウィリスが横目で俺を見ながら得意げに言う。

「無理、面倒くさい」

「国王命令だ」

「…お前のこと嫌いになっても良いか?」

ウィリスを見ながら淡々とした口調で言うと、ウィリスが明らかに動揺した。

このまま冷たい目で見ていたら国王としての威厳がまたなくなりそうだ。いや、今更か。

「分かったよ。ただし、タスクが来るまでだからな」

俺が溜め息を吐きながら言うと、ウィリスが顔を輝かせた。

俺が踊るのを見て何が楽しいんだか。

俺は内心で呟きながら、令嬢をダンスに誘いに行った。

接触

踊れないかと思ったが、体は覚えていたらしく、ウィリスのダンスを見て補足した事も相まってダンスは踊ることが出来た。

愛想笑いを浮かべて幾人かの令嬢と踊る。

それに疲れてきた頃、ようやく目的の人物が現れた。

「シルデイ、あれがタスクだよ」

ウィリスが踊りながら俺の背後で言う。

「あれか」

踊りながら、不自然にならないようにウィリスが視線で示した方向を見ると、翠を基調とした服に身を包んだ青年がいた。両脇と後ろに合計十数人の令嬢を引き連れている。

肩より少し長めの金色の髪は襟足が長く、紺碧の瞳は切れ長で流し目を直視した令嬢が倒れそうになっている。

それを見て俺は顔をしかめる。苦手なタイプだ。と、俺は即座に判断した。

「よく大臣が出来るな」

「彼は私のはとこでね。先々代が溺愛していた妹の孫なんだ。その妹が彼を甘やかしてね。両親ともにその妹に逆らえないらしい。最

初は厳しく接していたんだが、先々代の妹が煩くて諦めた」

「で、我がままで怠惰な駄目人間がコネで要職に就き、先々代の妹が怖くて手出しが出来ない、と」

「そういうこと」

曲が終わり、俺とウィリスは壁際に移動した。

「依頼は？」

「彼を失脚させて社交界から追い出すこと。城に出入り出来なくしてくれるとなお良い」

ウィリスの言葉に、俺は顔を顰める。そういう仕事は俺の仕事ではない。出来なくはないが。

「詐欺師にでもやらせたらどうだ？」

「君もある意味詐欺師だろう？」

「…確かにな」

俺が頷くと、ウィリスは可笑しそうに笑う。

「それに、国王命令だからね。拒否権はないよ。これ以上彼の為に国庫を圧迫する訳にもいかないし」

そう言って笑うウィリスは内心相当怒っているらしい。

ウィリスは基本的に実力主義だ。タスクの存在は許せないのだから。だが、国王と言う立場故にあまり大きく動けない。

先々代の妹は高齢ながら、一つの勢力を築いている。今のところ何の動きもないが、刺激しないほうが賢明だろう。

「了解。その代わり、手段はえらばねえぞ？怒るなよ」

「好きにすると良い。私が許す」

「その言葉、忘れるなよ」

口の端を吊り上げて笑ったウィリスに念を押しながら思う。

こいつって本当に国王向きだよな。自分で出来ないことは躊躇いなく信頼できる人物に頼む。自分で無理をして失敗するような事はない。

新しいことを受け入れる柔軟性も持っている。自分の意志を貫く強さも。それが、今の実力主義の国を創り上げた。

幾つもの仮面を使い分け、部下からの信頼も厚い。心配も掛けているだろうが、それぐらいの方が部下もやりがいがあるだろう。頼られて嬉しくない人間はいない。心底嫌いな相手でなければ。

「目的も果たしたし今日はもう帰る。これ以上いたらまた踊る破目になりそうだ」

俺はウィリスに軽く手を振って歩き出す。

「また来るかい？」

寂しそうな声に振り返ると、その声音にぴったりの表情をしたウィリスがいた。

「君は城にいていいんだよ？そんな仕事しなくても」

「良いんだよ。俺が選んだんだ。俺は、謀反を起こしたアレク・レジスタの息子だ。実の父親を告発した、な」

ウィリスの言葉を遮って俺は言葉を紡ぐ。

「それに、俺は陰謀渦巻く世界は苦手だ」

ウィリスはまだ何か言いたそうだったが、喋る隙を与えず俺は踵を返して出口に向かった。

「また来るよ。じゃあな、ウィリス」

背後のウィリスに視線を向ける事無くそう言って、俺は城を出た。

馬車には城門まで送ってもらい、そこから先は徒歩で帰る。

俺が城にいては、また無駄な権力争いが起きるだろう。面倒事はごめんだ。

「こんなもんか」

長時間で座っていたせいで強張った筋肉をほぐす。

「流石に疲れたな……」

四肢を伸ばして椅子の背もたれに凭れ掛かる。

家に帰り、取り敢えずタスクについてもっと詳しく調べた。

親のいる家では傍若無人に振る舞い、祖母の前ではいい子にしている。そのせいで、祖母はタスクの悪い噂に耳を貸さない。うちの子がそんな事をする訳がない、と言い張っているらしい。

その腐った眼球取り替えてやりてえ。平和な頭しやがって。そんなに孫が可愛いのか。そうか、頭も挿げ替えた方が良いのか？

毎日贅沢の限りを尽くし、自分の屋敷に毎日違う女性を招く。特定の相手はおらず、女性との不祥事は多々あるが全て金と権力で解決。

そんな奴を失脚させるには…

「協力してもらうか。詰めに關しては怒られそうだけどな、怒らないうって約束したしな、大丈夫か」

「若様がお会いになるそうです」

「ありがとう」

執事に礼を言い、その後を付いて行く。

若様とはタスクの事だ。

今、俺はウォーレン公爵家に來ていた。勿論、タスクに会うためだ。

「若様、シルディ・レジスタ様をお連れしました」

執事がある部屋の立ち止まり、ノックをして中に呼びかける。

「お通ししろ」

暫くして、艶のある声が中から返ってきた。

「失礼致します」

執事が扉を開け、脇に退く。執事に目礼をし、中に入ると、椅子に座っていたタスクが立ち上がる。

「初めまして、タスク・ウォーレンです」

「シルディ・レジスタです」

互いに握手を交わし、勧められるままソファに腰掛ける。タスクも俺の目の前に座り、侍女にお茶の用意をするように指示した。

「で、今日はどのようなご用件でしょう。シルディ殿。軟禁状態と聞いたのですか？」

タスクが単刀直入に聞いてくる。男と無駄な会話をする気は無いらしい。その目が物語っている。

その方が楽で良いがな。愛想笑いしていると顔の筋肉が攣る。

「国王にお願いして外出許可を頂きました。今日は挨拶に伺っただけです。貴方に憧れているので」

俺は笑みを浮かべながら言う。

「憧れ？」

そう言ったタスクの声は、先程よりも少し上擦っていた。今にも緩みそうな顔をしている。

「ええ、貴方はとても女性に人気があると聞いたので」

「まあね」

俺が言うと、タスクは前髪を片手で掻き上げた。

気持ち悪。ナルシストの典型的な例だな。此処まで来るといつそ清清しいな。きもいけど。

「求婚して来る女性が多くて困っているとか。タスク殿は素晴らしい美貌をお持ちですから」

「僕が気に入る女性がなくてね」

少しおだてるだけで、タスクは簡単に調子に乗っていく。先程ま

で帰れと言わんばかりの目をしていた事が嘘のようだ。

きちんと座っていた姿勢も、今では片手をソファの後ろに垂らし、足を組んでいる。

想像していたよりもずっとお調子者らしい。これで大臣になれたのだから、先々代の妹の影響力は凄まじい。

「今日は、是非紹介させて頂きたい人がいるのですよ。私の友人です。ミリア」

扉の方を見て、外にいるであろう人物に声を掛ける。

「シルデイ様、もう少し早く呼んで下さいな。一人で待つのは寂しいんですよ?」

そう言いながら入って来たのは、艶やかな黒髪を縛り、微笑を浮かべた女性だった。背は俺より少し低いぐらい。アイスブルーのドレスが体の線をあらわにしている。

「すまない。タスク殿に会えたのが嬉しくてね」

「分かっていますわ。楽しみになさってたものね」

ミリアはアメジストのような瞳にからかいの色を浮かべる。凜とした雰囲気の中に、無邪気さが混じる。

「初めまして、タスク・ウォーレン大臣。ミリア・カストールと申します」

ミリアはタスクに向き直り、微笑を浮かべながら優雅に一礼した。

「初めまして、タスク・ウォーレンです。貴女のような美しい女性にお会いできて光栄です。私のことはタスク、と呼んで下さい」

ウォーレンはミリアの手を取ると、その甲に恭しく口付けた。ミリアは微笑を維持している。内心では何を思っているか分からないが。

「お世辞がお上手ですね」

「とんでもない、本心ですよ」

ミリアが笑いながら言うと、タスクは微笑みながら答えた。

…気持ち悪っ。ミリアもよくこんなのを前に笑顔でいられるな。

まあ、頼んだの俺だけだ。

「嬉しい事を言ってくださいませね」

ミリアが片手で口元を隠しながら言う。タスクからは見えないが、その口元は引き攣っていた。心なしな表情も硬い。

そろそろ限界、か。爆発する前に退散するか。

「申し訳ありません、用事があるので、我々はこれで失礼致します。またお伺いしても？」

俺が立ち上がると、ミリアは俺の方を向いて安堵した顔になった。

「是非、お二人でまたいらして下さい」

「ええ。その時はもう少しゆっくり出来るかと思います。では、また後日」

「次にお会いするのを楽しみにしておりますわ、タスク様」

俺とミリアは最後にタスクに笑顔を向け、部屋を後にした。

屋敷から出ると、外に待たせていた馬車に乗る。その馬車も、塔に辿り着く手前で降りた。

元殺し屋

「次は何時行くの？」

タスクに会った翌日、そのまま塔に泊まっていたミアが朝食の準備をしながら聞いてくる。泊まったと言うか、一緒に住んでいるので帰って来た、と言った方が正しいだろう。

「んゝ あんま時間空けない方が良くもな」

俺は椅子に腰を下ろしながら答える。低血圧なので、頭はまだ働いていない。ついでに、髪をまだ縛っていない。

ミアはコーヒーと朝食のトーストとスクランブルエッグとサラダを俺の前とその向かい側に置き、自分も座った。

「明後日ぐらい？」

「そんならいだろ」

俺はコーヒーを飲みながら頷く。朝はコーヒーを飲まないで頭が働かない。

「そっか」

ミアは頷くと、朝食を食べずにじっと見てくる。気にせずトーストを口にしたが、余りに長く、熱心に見てくる。しかも無言なので気になる事この上ない。

せめて何か言えよ。とういか朝食を食え。冷める。

心の中でばやくが、ミリアは微動だにしない。

「何だ？」

俺は手にしていたフォークを置いてミリアを見返す。

「いや、シルデイって髪の毛下ろしてると女の人みたいだね。しかも超絶美人の」

ミリアは何故かうんうんと頷きながら言う。その声が何処か嬉しそうなのは気のせいだろうか。気のせいであって欲しいと思う。

てか、男で美人って言われて喜ぶのは自分大好き野郎だけだろ、タスクみたいな。俺はああはならん。絶対やだ。

「それは馬鹿にしてんのか？」

「違うよ！褒め言葉だよ！」

若干低い声で言うと、ミリアが慌てて首を振る。

「美人とか言われても嬉しくないし、俺は女みたいじゃない」

「でも、役に立ってるでしょ？」

「…まあな」

首を傾げながら言うミリアに、俺は慚然として答える。

確かに役に立ってはいる。いる、が。嬉しくない。まして恋人に女みたいって言われるのは遠慮したいな。精神ダメージ半端ないから。

「タスクもシルディが女装して誘惑した方が良かったんじゃない？」

「却下」

ミリアの提案を即座に却下し、食べ終わった食器をシンクに運ぶ。

これ以上此処にいたらミリアがまた何か言い出しそうだ。女装なんかしてたまるか。あんなキモイ奴の前で。

「明後日タスクのとこまた行くからな。準備しとけよ」

「了解。どっか行くの？」

外に出掛ける準備をした俺を見てミリアが言う。

「体動かして来る」

「帰りは夕方？」

「多分な」

俺は髪を何時ものように一つに縛りながら答える。持ち物は特にない。これから行く場所に全て揃っている。

「ん。夕飯作っとくね」

「頼む。じゃ、行つて来る」

「行つてらっしゃい」

ミリアは残つて掃除をするのだろう。何時もの如く。とは言え、シルディは几帳面なのでほとんど掃除する所はないが、そこは恋人として譲れないらしい。よく分からない。

俺はミリアの見送りの言葉に背を押され、塔を出た。

そのまま徒歩でソーディアンへ向かう。正確には、その地下に。

街を歩き、向けられる視線を全て無視して目的地に向かう。今日は声を掛けてくる女もいなかった。相変わらず視線は鬱陶しかったが。

「シンラ」

俺はソーディアンの扉を開きながらカウンターでグラスを拭いているシンラを呼ぶ。

「お、どうした？」

シンラは手を止め、驚いたように俺を見た。

「地下の訓練場使いに来た。今誰かめばしい奴いるか？」

「今か？うゝん、双剣使いのジェットがいたな」

「強いのか？」

「お前に匹敵する程強い奴はそうそういないだろ」

聞いた事のない名前に首を傾げると、シンラが苦笑する。

「お前が相手してくれれば良いだろ」

俺は口の端を吊り上げて笑いながらシンラを見る。

シンラは四十を過ぎているが、若い時は名を知らぬ者がいない程の有名人だった。今は前線を退き、裏方として働いている。が、今でも十分強い。新人の教育係を勤めるのは大抵シンラだ。

俺に殺しの術を教えたのもシンラだしな。勝った事ねえけど。

「冗談。老人は労わるものだぜ？」

「誰が老人だ、誰が」

こんな迫力ある老人いてたまるか。

「ま、行けば誰かいるだろ。お前と戦いたい奴はごまんといるさ」

「しょうがねえ、片っ端からやるか」

「そうしろ。お前とやると他の奴がやる気出すからな」

俺が溜め息混じりに言うと、シンラが笑いながら言う。

やる気を出した奴を扱くつもりなのだろう。立てなくなる程に。

俺は心の中でそいつらに合掌してから入り口とは真向かいにある壁の前に立ち、目の前の壁を押した。同時に、シンラも手元にあるボタンを押す。

「頑張れよ」

「頑張るのは俺に負けてお前に扱かれるやるだろ」

「違うない」

俺が皮肉げに言うと、シンラは声をあげて笑った。本気で扱くつもりらしい。

ま、そこで挫けたらそこまでの奴だった、って事だな。それを乗り越えられたら一人前、だな。俺は死ぬかと思ったけどな、本気で

俺はシンラに扱かれた時の地獄を思い出しながら地下へと下りて行った。

「お待ちしておりました、ミリア嬢、シルディ殿」

執事に案内された部屋に入ると、タスクが満面の笑みで出迎えた。と言っても、その笑顔はミリアに向いているのだが。

普通名前呼ぶ順番逆だろ？この坊ちゃんは礼儀も知らねえのか？自分大好き野郎に笑顔向けられてもキモイだけだから良いけどな。ミリアの顔も心なしに引き攣ってるし。

「先日は慌しくて申し訳ありませんでした」

「お気になさらず。今日はゆっくりしていけますか？」

「ええ。陛下の許可も頂いて参りました」

頭を下げると、タスクが初めて俺を見た。それでも、横目でミリアを見ている。

つくづく礼儀を知らねえ奴だな。人と話してる時は相手を見るよ、この女タラシが。

内心で毒づくが、勿論表情には出さない。

「ミリア嬢には私の母に会って頂きたいのですが、よろしいですか？」

「私が、ですか？」

タスクの言葉に、ミリアは驚いたように返す。

「ええ。母が是非会いたいと言っていて…」

タスクは苦笑しながら言う。

が、おそらく嘘だろう。母が会いたいと言ったのではなく、タスクが会うように言ったのだろう。タスクの両親は自分の息子に逆らえないらしいから。正確には、その背後に控えている祖母に。

「構いませんよ。どちらにいらっしゃいますか？」

ミリアが視線を寄越してきたので頷くと、ミリアは笑みを浮かべてタスクに言った。今のやり取りはタスクには気付かれていない。

「案内させましょう」

タスクが近くにあった鈴を鳴らすと、壁際に控えていた侍女が一人歩み出た。

「ご案内いたします」

ミリアの前で頭を下げた少女はミリアを促し、部屋を出て行った。

部屋には俺とタスクと侍女が数人。その侍女も、タスクは下げさせた。つまり、部屋には俺とタスクだけって事だ。

「取り敢えず座りましょうか」

タスクが笑みを浮かべて言うので、俺も微笑を返しながら腰を下ろした。

王弟殿下の噂

「彼女はとても貴方と仲が良いのですね」

と、腰掛けた途端タスクが言った。笑みを浮かべてはいるが、敵意が隠しきれていない。ま、俺に隠せるのはシンラとかだけだろうけどな。

「幼い頃から共に過ごしてきましたから。家族のようなものです」

微笑を浮かべて言うと、タスクは怪訝な顔をした。ミリアの近くに男がいるだけで気に食わないらしい。

独占欲強いな、おい。ミリアが嫌がりそうだ。

ミリアは基本的に自由奔放に生きるのが好きだ。雁字搦めに縛られるのは好きではない。俺も嫌だけどな。

「家族、ですか？血縁関係は？」

タスクはなおも聞いてきた。どんだけ俺を敵視してんだ、こいつ。俺とミリアの関係に関して何か覚ってんのか？…ねえな、それは。

「ありませんよ。ですが、家族です」

家族、あながち嘘ではない。

俺が笑顔で言い切ると、タスクは安堵の溜め息を吐き出し、次いでその顔に嫌味ったらしい笑みを浮かべた。

「家族ならば、彼女の幸せを望むよな？」

タスクの笑みは獲物を見つけた猛獣のようだ。よう、じゃなく実際に猛獣か。

ミリアを手に入れる為ならば手段は選ばない。そんな事を考えているように見える。

「勿論です。彼女が、真に想う人と結ばれる事を願っています」

「結構。君が物分りの良い人物で良かった」

俺は笑顔でその言葉を聞いていたが、内心は真っ黒だった。

いちいち偉そうな態度が苛つく。いや、大臣だから偉いのか？が、それはこいつの実力がある訳じゃねえしな。祖母が偉いだけか。何で失脚だけなんだろう。それ以上は駄目なのか。…つまらねえな。

タスクの満足そうな笑みを見る限り、ミリアを落とす自信があるらしい。それが叶わない事だと分かっている俺からすればとんだ滑稽譚だ。

「そう言えば、ウォーレン殿はご存知ですか？」

「何をだ？」

「現国王の弟君の事ですよ」

途端に、タスクの表情が固まる。王弟の事は存在は知られていて

も、実態は知られていない。本当にいるのかさえ定かではない。が、それを国王に尋ねる者はいない。国王がその話題を嫌うからだ。

「…余り知らん。ただ、病弱で部屋けら出られないらしい」

タスクが眉間に皺を寄せながら言う。

「そうですか…。好奇心が疼いたのですが、調べても何も分からないんですよ…」

俺は溜め息を吐いて見せた。しかし、タスクは相変わらず俺を疑わしげな顔で見ている。

ここで爆弾投下したらどうなるかな。楽しそうだな。ミリアが怒るかしんねえけど、ま、いいか。

「弟君がミリアを見初めたと言う噂があるのですが、真偽の程が分からないんですよ。今の所縁談等はありませんが…」

俺が尻すばみに言うと、案の定タスクの表情が強張った。

ざまあみる。こう見えて演技は大得意だ。

俺は内心で嘲笑した。これでタスクは焦るだろう。諦める事を知らないらしいからな。それ自体は良いんだが方向性が間違ってたんだよな、こいつ。

ま、計画の為に嘘ぐらい何回でも言ってる。

「そうか。彼女を手に入れる為には、王弟殿を敵に回す事になる、

と」

「あくまで噂です。ミリアも王弟殿下にお会いした事はないそうです」

タスクが視線を床に落として呟く。

さて、どうでるかな？

「分かりました。教えてくれて感謝する。後日、彼女と貴方を夜会に招待しよう。」

彼女は手に入れる。例え、王弟殿を敵に回しても」

「そうですか」

黒い笑みを浮かべたタスクに、俺は静かに微笑んで頷いた。

もっと騒ぐかと思ったが、意外に淡白だったな。ま、王弟に敵意は持ったから良いか。これで俺に突っ掛かって来るのも減りそうだしな。

「さて、母上とミリア嬢の所に行こうか」

「私もお邪魔しても？」

意気揚々と立ち上がったタスクに、俺は尋ねる。タスクは頷き、連れ立って部屋を出た。

タスクの後を追いついて、辿り着いたのは庭園。季節の花が美しく咲き誇る広大な庭だ。

その中に造られたテラスで、ミリアと一人の女性が談笑していた。女性はタスクの母親だ。美形な息子と違って平凡な容姿だが、包み込むような温かさがある、らしい。

包み込む温かさは持つていても芯は強くない。タスクの父親は美形だが気が弱い、と。こりゃあの糞ババアには逆らえねえな。人の弱みに付け込むの好きだからな、ババア。

俺は先々代国王の妹の情報を思い出しながら、四人のお茶会を楽しんだ。いや、楽しくなかったな。疲れただけで。

「タスクの母親と何話したんだ？」

ミリアが作った夕食を食べ終わり、食後のコーヒーを飲みながら皿洗いをしているミリアに尋ねる。

「息子の自慢話ばかり。余程私とタスクをくつつけたいのね」

「タスクがくつつきたい、の間違いだろ」

ミリアが疲れたように言った言葉に、俺は笑いながら訂正を入れた。別にタスクの母親はミリアとタスクをくつつけたい訳じゃない。

むしろ、何処かの令嬢とくつつけたいだろ。ミリアのような一般庶民ではなく。

ミリアは俺の家に仕えていた執事の娘だ。俺の遊び相手でもあった。小さい頃は泣いてばかりだったので俺が世話を焼いていたのだが。

「でも、あのナルシストには逆らえないんですよ」

「その背後に控えるババアにな」

俺は言いつつ鼻で笑う。おしとやかな女性は貴族の妻としては理想的なのだろうが、俺としてはご免だ。唯々諾々と従う女はつまんねえ。ミリアぐらい活き活きとしている方が良い。

「次は夜会？」

「だな」

ミリアの問いに俺は頷くと、コーヒーを飲み干した。そのコップをミリアに渡し、洗ってもらう。

「服どうしようかな…」

ミリアは皿洗いを終わると、手を拭きながら俺の正面に座った。

貴族達の夜会では女性は皆着飾る。男性も着飾るが、女性程ではない。

「ウィリスに言えば嬉々として用意してくれるんじゃないか？」

俺はぼーっとしながら何気なく言う。頼まなくても時折服を送っ

てくるウイリスの事だ、頼めば喜び勇んで用意するだろう。

その場合、気合が入り過ぎそうで怖いが、仕方ないだろう。買う金が無い訳ではないが、正直面倒だ。店に行ったら確実に騒がれる。

俺が言った言葉に、ミリアは溜め息を吐いた。

「国王を顎で使えるのはシルディだけだよな」

「向こうも顎で使ってるからお互い様だろう？」

何か根本的に違う気がする、とミリアは思ったが、口には出さなかった。幼い頃から二人は一緒にいたのだ。それ程気安い関係なのだろう。国王と謀反を大臣の息子と言う枠を超えて。

ミリアは確かに小さい頃からシルディといたが、それは屋敷の中だけの話。シルディは基本的に城に住んでいた。屋敷に帰って来るのは週に一度程だった。当然、ミリアよりウイリスの方がシルディと過ごした時間は長い。

それをひっくり返すのがミリアの目標だ。その為に、仕事は迅速に終わらせる。

「頼ると喜ぶから良いんだよ。たまに構わないと拗ねるしな」

国王にそんなもの言い出来るのはシルディと先代国王ぐらいかな、とミリアは思ったが、もう一人いたりする。無論、カルラだ。

と言うか、ミリアもウイリスに対して結構容赦が無い。二人してシルディの奪い合いを始めるからだ。

だから城の夜会とかに行くのは嫌なんだがな、と俺は何時も思っ

王弟殿下の噂（後書き）

お久しぶりです！

もう一方の小説が行き詰ってしまったので、暫くこちらの執筆に励みたいと思います。

夜会

タスクから夜会の招待状を受け取り、やって来たのはウォーレン家の別荘。といっても、こぢんまりしたのではなく、十分な広さがある。

そして、存在感も十分にあった。貴族の屋敷が並ぶその通りでも、一際。何故かと言うと――。

「派手だな」

俺は顔を顰める。これといった装飾が施されていない真っ白な塔で過ごしてる俺にとってこの無駄に豪華絢爛な屋敷は目が痛くなる。

実際、中は派手だった。

赤色の絨毯には金糸で刺繍がふんだんに施され、壁にはウォーレン家の家紋である鷲と王家の家紋である獅子が描かれている。鷲は下に、獅子は上に。

天井からはシャンデリアがこれでもか、と言う程垂れ下がっている。天井は金色で、そこに様々な色で絵が描かれている。

極めつけはタスクの服装だ。瞳と同じ紺碧の衣装に身を包み、金の装飾品を至る所に着けている。頭、耳、胸元、肩、腰、足首…。

こいつの装飾品売ったら結構な金になりそうだな。一個ぐらい失敬してもばれねえよな。…止めとくか、こいつの持ち物なんざ触りたくもない。変なのがうつる。

個人の夜会なので、翠を着る必要は無い。つまり、タスクがしたい格好が出来るのだ。

それがあれか…。俺なら絶対ごめんだな。あんな目立つ服。

タスクは貴族達に囲まれていた。比率的には男性より女性の方が多い。

「私達って場違いじゃない？」

隣に立っているミリアが呟く。

確かに、この場にいる者達は派手に着飾っている。その中で、シンプルな服を着ている二人は浮いていた。

「招待したのは向こうだ。それに、愛しのミリアならどんな服を着ててもあいつは褒めると思うぞ？」

俺が笑いながら言うと、ミリアは不満そうに唇を尖らせた。俺の言葉が気に入らなかったらしい。事実だと思っただがな。

「タスクに褒められても嬉しくない」

ミリアは憮然として言った。ミリアは基本的に軽い男は嫌いだ。馬鹿も自己中心的な奴も自分大好きな奴も好きじゃない。つまり、タスクは眼中にない。

対象として見られたら俺が怒るけどな。

「今日も綺麗ですよ、姫君」

俺はミリアの手をとり、甲に口付けて微笑んだ。ミリアの頬が赤くなり、俺は笑う。

二人は確かに浮いていたが、それは服装だけでなく、その容姿故に目立っていた。

ミリアの黒髪は今は下ろされ、瞳と同じ色のドレスは肩が空気にさらされており、男共が露骨に眺めている事に苛立つ。

「それならシルディの服装も珍しいじゃない。何時もは白しか着ないのに」

ミリアが少し頬を染めたまま俺の服装を見る。

「しょうがないだろ。服貸せって言ったらこれ送って来やがったんだから。しかもメッセージカード付き」

俺は苦々しく言った。送ってきたのは勿論ウィリスだ。

『君には黒も似合うよ。是非着てみてくれ』だ、そうだ。

他にもごちゃごちゃと気色悪い事が書いてあったが、読む前に捨てた。

「銀髪が映えて良いんじゃない？」

俺が着ているのは、王宮に着て行った物と似ている。違うのは、色が黒い事と、金系ではなく銀系で刺繍が施されている事ぐらいだ。

一つにまとめ、背中に流している銀髪が黒によってよく目立つ。

「絵になってる。写真とって売ったら即完売しそうだね」

ミリアが嬉しそうに言った言葉に、俺は顔を顰めた。なんで好き好んで自分の写真を売らなきゃいけないだよ。見ず知らずの女が俺の写真持ってたなら怖えよ。

「笑ってようよ。せつかくカッコイイのに」

「そしたら女達が寄って来そうだけどな」

俺がからかうように言うと、ミリアは頬を膨らませた。てか、俺が笑うと女達が群がりそうって言ったのミリアだよな。その時すっげえ嫌そうな顔してたし。

俺はミリアの苦りきった顔を見てつい笑ってしまった。

と、その後ろから誰かが近づいてくる気配がした。その気配を感じ取った俺とミリアは、同時に無表情になる。

「来たぞ、頼んだ」

小声でミリアに告げると、ミリアは無言で頷いた。

次の瞬間には、ミリアと俺は何事もなかったかのように微笑んでいた。近づいてくる気配に気付かぬ振りをしながら、談笑を続けた。周りから見れば、さぞ仲睦まじく見えるだろう。その証拠に、近

づいてくる気配には怒りが含まれている。

足音は一定のリズムを保ち、比較的ゆっくりと響いているが、足に余程力を入れているのか、その音は硬い。

「ミリア嬢、シルデイ殿。今日は来てくれてありがとうございます」

近づいて来たタスクが微笑みを浮かべながら言う。周りに居た貴族達を振り払ってきたらしい。今までタスクと話していた貴族共がこつちを睨んでいる。

「お招きありがとうございます。今日はミリアも楽しみにしていたのですよ」

「こういう場にはあまり来ないものですから」

俺がにこやかに言うと、ミリアは笑いを堪えているのか、微妙に顔を引き攣らせながら頷いた。

笑いを堪えている理由は、タスクの目だ。顔を俺に向けたまま、ミリアに流し目をしているのだ。正直殴り飛ばしたい。

タスクの流し目は他の女性には有効だろうが、ミリアには逆効果だ。

「喜んで頂けたのなら、招待した甲斐があると言つものですね。さて、一緒に踊って頂けますか？」

タスクがミリアに片手を差し出す。それと同時に、演奏が始まり、中央に男女のペアが進み出て踊り始める。

「喜んで、ウォーレン様」

ミリアは微笑みながらタスクの手を取った。

俺はミリアを借りていく、というようなタスクの視線に頷き、中央に歩いていく二人を見送った。

が、俺は即座に後悔した。仕事のためとは言え、ミリアに傍にいてもらえば良かった。

何故なら、二人が離れるとほぼ同時に女共がわらわらと寄って来たからだ。しかも派手過ぎて目が痛えし、香水がくせえ。

邪険に扱うわけにもいかず、俺は笑みを貼り付けて対応した。内心で、どれだけ厚化粧してんだろうな、こいつら。とか思いつつ。

タスクのことはミリアに任せておけば問題ないだろう。後で話を聞けば良い。

ダンスに誘われ、どうせやることもないので応じた。が、いかにせん人数が多すぎるため、一人一曲ずつ。それが限界だ。俺の精神的に。そもそも、踊りは好きじゃない。

「…この人数はありえねえだろ」

思わず呟いてしまうほどの人数だった。しかも、タスクがミリアから離れないので、タスクに相手にされない女共が俺の方に流れてきている。

つまり、俺に女が集まるのはタスクのせいだ。あいつが何時もどおり色んな女を相手にしていれば俺はこんな状況には陥らなかったはずだ。

「絶対消してやる」

俺の怨念の籠もった呟きは、誰の耳に届く事もなかった。

ま、消すのは社会的にであって、命ではないんだけどな。あくまで依頼は抹殺じゃなくて失脚だ。

俺はそのことを忘れないように頭の中で繰り返した。うっかり手を出してしまわないように。

狂気

「で、どうだった？」

今いるのは家である塔の一階の客間である。客間と言っても、客など来ないが。

俺はソファーに座り、向かいに座るミリアを見た。

夜会の時、タスクはミリアを離そうとはしなかった。参加した貴族達に見せびらかしたかったのだろう。実際、貴族達は「タスク殿が特定の女性と……！」と、騒いでいた。

ミリアは他の女共に睨まれていた。が、本人はその一切を無視した。ついでに、タスクのアプローチも気付かない振りをして無視した。

その度に悔しそうな顔をするタスクの観察は楽しかったな。あれである程度溜飲が下がったし。

「結構落ちたと思うよ。後はもう少し焦らそうかと思って」

「で、一気に爆発させて馬鹿な行動に走らせる、と」

俺が言うと、ミリアは笑いながら頷いた。

「あんまり忍耐強くなさそうだから」

ミリアの言葉に、俺は深く頷く。今まで散々甘やかされてきたの

だ、ご馳走を目の前にして待てなど出来ないろう。

俺にとっちゃそっちのほうが好都合だな。馬鹿は嵌め易い。

「ま、シルデイの為ならどんな男だって落として見せるよ」

「有難いね」

ミリアが不敵に笑いながら言った言葉に、俺は苦笑した。

「本気だけど」

俺が笑ったことが気に入らなかったのか、ミリアは頬を膨らました。

「分かってるよ」

立ち上がり、ミリアの膨らんだ頬に軽く口付けると、膨らんでいた頬がしぼんだ。代わりに、真っ赤になっている。

そして、はにかむように微笑んだ。

ミリアは表情が良く変わる。裏の仕事に就いているとは思えない程だ。この染まらない感じが良いんだけどな。

「仕事が片付くのも時間の問題だな」

予定より早く終わりそうだ。その後暫くは仕事休むか。

「この仕事終わったらどっか出掛けるか？」

「夜会か舞踏会に連れてってくれるんじゃないの？」

「…終わったらな」

行きたくないが、ミリアが行きたいならしょうがない。ゆっくり過ごせる貴重な時間だ、望みぐらい叶えてやっても良いだろう。

まあ、ウィリスが突進してきても避ければ良いだけだしな。カルラが止めてくれるだろうし。

ミリアが笑ってくれるなら、それで良い。ミリアは、俺にとって特別だから。俺の親が反逆者でも、俺が暗殺者でも、俺が何者でも受け入れて、変わらず傍にいてくれるから。

「ありがとな」

自然と笑みが零れ、穏やかな気持ちになった。

ま、言われた本人は何のことだか分からずに首を傾げてたけどな。

それから、タスクは頻繁に夜会を開き、毎回俺とミリアを招待した。ま、目的はミリアだけだな。俺はタスクにとっちゃおまけだ。

こちらからも、昼間にウォーレン家を訪れるなど、積極的に接触を図った。時には、ミリア一人で行かせた事もある。

そのお陰か、タスクはミリアにどんどん溺れていった。遂には女性関係を清算し、ミリアに対して真剣だという姿勢を示した。

しかし、ミリアはタスクをのりくらりとかわし続けた。タスクに希望を持たせるような言動をしつつも、その気持ちを受け入れる事はない。

タスクは焦っていた。彼の情報網に、現国王の弟に動きがあったとの情報が引つ掛かったからだ。タスクには、時間も余裕もなかった。

「ミリア、何故私の求婚を承諾してくれないのですか？私の想いは貴女には届きませんか？」

ウォーレン家の一室に、ミリアとタスクが居た。部屋に居た侍女達は皆タスクが下がらせたため、部屋には二人だけだ。

ミリアはソファアに座り、タスクは彼女の片手を取って跪いている。

「私は、現国王の弟君にいずれ嫁がなければならない身です。逆らう事など出来ません。

でなければ、私の大切な人達はただでは済まないでしょう。病弱とは言え、相手はれっきとした王位継承者なのですから」

ミリアは辛そうな顔をしながら言った。その声は苦渋に満ちている。

「弟君がなんだと言うんだ！私は…俺は、貴女に傍に居て欲しいんだ！」

タスクが叫ぶ。懇願するようなその声は、普段のタスクからは考えられないようなものだった。

ミリアは苦渋の表情のまま、無言で首を振った。そして、真っ直ぐにタスクを見た。悲しそうな、何かを堪える瞳で。

「お気持ちはとても嬉しいです。ですが、弟君が居る限り、貴方の気持ちに応える事は出来ません。
…許して下さい」

ミリアが微笑む。

そんなミリアを、タスクは耐えかねたように抱き締めた。

「タスク様！？」

突然の事の、ミリアは動揺して叫び声を上げる。しかし、タスクは腕の力を強めただけで、ミリアを離す事はしなかった。

動揺するミリアの耳に、タスクの小さな呟きが聞こえた。

「…弟君が、居なければ、良いんだね」

タスクの囁きに、ミリアは弾かれたようにタスクを見上げた。

その先には、タスクの笑みがあつた。不敵な笑み。狂気に陥る一歩手前のような雰囲気。

狂った。そう思った。

タスクは元々狂気の種を持っていた。それが、芽を出した。いや、出させた、と言った方が良くかもしれない。

「何をなさるおつもりですか!？」

「待っていてくれ、ミリア。必ず迎えに行く」

再び叫んだミリアに優しい笑みを向けると、タスクは部屋を出て行った。その頭の中には、どうやって弟君を消すか。その事だけが浮かんでいた。

足音が遠ざかり、遂に聞こえなくなる。

「これで良い? シルディ」

ミリアが唐突に言う。さっきまでとは違い、落ち着いた声だ。その声が、誰もいないはずの部屋に響く。

「ああ。悪いな、何時もこんな役ばっかで」

その言葉に応えるように、俺は天井裏から音もなく着地した。

今までずっと天井裏にいて、全てを見ていたのだ。計画通り、タスクは弟君に手を出す。後は、それを止めるだけだ。犯行現場を押さえるのが一番望ましい。

「仕事だからね。これで、計画進められるんでしょ?」

背後から近づく俺に、ミリアが笑顔で振り向いた。俺は、微笑みながらそれに頷いた。

タスクは袋のねずみも同然だ。あつさり騙され、自分で自分を破滅に追い込んでいる。ミリアの芝居にも、気付く事はないだろう。

「あんまり面白くないな。やっぱ、命のやり取りが無いとつまんねえ」

「安全第一でしょ」

俺が言うと、ミリアが手を腰に当てて怒ったように言う。

そもそも、この仕事してる時点で安全第一とか無理だろ。と、思ったが、口には出さなかった。

「ま、取り敢えず帰るか」

俺は代わりにそう言うと、部屋の窓に足を向けた。

此処はまだウォーレン邸なのだ。近くに人の気配がないからこそ、天井裏から降りてきたが、俺が玄関を通って帰る訳にはいかない。俺は今、此処には居ないはずなのだから。

ミリアは普通に玄関を通って外に出た。

「仕事終わったら舞踏会に行くって約束、忘れないでね」

外で落ち合うと、ミリアが俺の手を握りながら念を押してきた。

余程行きたいらしい。

「ああ、仕事が終わったら、な」

ミリアの手を逆に握り返し、その甲に軽く口付ける。

そうして、ミリアは帰って行った。ミリアは塔に住んでいる訳ではない。入り浸ってはいるが。

本人に言わせれば、塔が家で、本当の家は宿みたいなものなんだそう。俺が仕事の事を考える時に一人になりたがるのを良く分かっている。

ミリアの姿が見えなくなるまで見送り、歩き出す。向かうのは塔。

「もうすぐ終わりだ。最後に気付くか？自分が騙されている事に」

そうなると面倒だが、その方が楽しそうだな。口には出さず、心の中で続ける。

どちらにしても、社会的に抹殺してやるさ。二度と、ミリアに近付かないように。二度と、ウィリスの前に現れないように。ウィリスの、邪魔をしないように。

「それが、俺に出来る事だ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019u/>

assassino di argento

2011年11月15日17時54分発行